

令和4年度

劇場・音楽堂等機能強化推進事業

(劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業)

自己点検報告書

団 体 名	公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団	
施 設 名	彩の国さいたま芸術劇場	
助 成 対 象 活 動 名	新芸術監督体制への移行～多様な人々が行き交うオールインクルーシブな劇場へ～	
助 成 期 間	5	(年間)
内 定 額	61,994	(千円)

1. 事業概要

(1) 事業計画の概要

全体図（概念図）

新芸術監督体制への移行 (事業名) ～多様な人々が行き交うオールインクルーシブな劇場へ～

ミッション

1. 世界に通用する舞台芸術を創造・提供する
2. 県民に対し、満足度の高い芸術文化活動の実践の場を提供する
3. 社会や地域の課題に対し、芸術文化活動を通じてその解決に貢献する

次期芸術監督との
イメージ共有・
企画立案

全職員によるミッションと課題の共有
解決策の検討・提案

持続可能な組織
人材活用

社会・地域における課題発見

財源確保

広報の充実

ニーズの把握

ビジョン

多様な人々が行き交うオールインクルーシブな劇場へ

新芸術監督の就任
(令和4年4月～)

事業の実施
(アウトプット)

埼玉県との連携

創造・発信

世界に通用する
舞台芸術の創造・発信

ジャンル・クロスिंगな
事業企画

普及啓発

県内学校と連携した
アウトリーチ事業と
キャラバンによる県内巡回

親しみやすい舞台芸術
プログラムによる観客育成、
裾野の拡大

親子で楽しめる良質な舞台
芸術プログラムの提供

社会包摂

高齢者・障がい者等による
舞台芸術表現の可能性の追求

多様な人々に参加できる
芸術文化活動の推進

ダイバーシティ・シアター
(仮称)

人材養成

次代を担う
アーティスト・
専門人材の
育成

若手ダンサー、
演奏家、落語家
等の起用

大学等との連携

芸術文化活動への支援
貸館事業の促進

事業のオンライン展開

大規模改修工事による劇場のバリアフリー化等利便性向上
(令和4年10月～令和6年3月)

アウトカムの発現

- 良質かつ先進的な舞台芸術の創造・発信・育成
- 多様な世代・属性の人々が文化芸術を鑑賞・体験する機会の拡大
- 舞台芸術による社会包摂的アプローチの推進

(2) 令和4年度実施事業一覧

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	彩の国シェイクスピア・シリーズ番外編『ヘンリー八世』	9月16日(金) ～9月25日(日)	演出：吉田鋼太郎 出演：阿部寛、吉田鋼太郎、金子大地、宮本裕子、山谷花純、谷田歩、河内大和 他	目標値	6,529
		大ホール		実績値	7,740
2	彩の国シェイクスピア・シリーズ番外編『ジョン王』	2月17日(金) ～2月24日(金)	演出：吉田鋼太郎 出演：小栗旬、中村京蔵、玉置玲央、白石隼也、高橋努、植本純米、櫻井章喜、吉田鋼太郎 他	目標値	7,201
		埼玉会館 大ホール		実績値	9,718
3	ジャンル・クロスⅡ『導かれるように間違えよう』	7月10日(日)～18日(月祝)※一部中止	作：松井周 演出・振付：近藤良平 出演：成河、亀田佳明、宮下今日子、荒木知佳、中村 理、浜田純平	目標値	1,808
		小ホール		実績値	1,461※
4	ディミトリス・パパイオアヌー『TRANSVERSE ORIENTATION』	7月28日(木) ～7月31日(日)	演出・振付：ディミトリス・パパイオアヌー	目標値	2,281
		大ホール		実績値	2,383
5	クロノス・クアルテット《ブラック・エンジェルズ》	9月30日(金) ※中止	新型コロナウイルス感染症の影響により公演中止	目標値	532
		大ホール		実績値	-※
6	バッハ・コレギウム・ジャパン ベートーヴェン「第九」	12月3日(土)	出演：鈴木優人(指揮)、バッハ・コレギウム・ジャパン(合唱&管弦楽) 他	目標値	1,085
		埼玉会館 大ホール		実績値	1,025
7	NHK交響楽団	10月2日(日)	出演：アレクサンダー・リープライヒ(指揮)、小菅優(ピアノ)、NHK交響楽団(管弦楽)	目標値	1,111
		埼玉会館 大ホール		実績値	1,205
8	人材養成事業(さいたまダンス・ラボラトリ+岡田利規×湯浅永麻『わたしは幾つものナラティブのバトルフィールド』公演)	8月2日(火) ～9月4日(日)	ワークショップ講師・振付家：中村恵理、湯浅永麻 テキスト・演出：岡田利規 出演：湯浅永麻、太田信吾	目標値	20
		小ホール 他		実績値	23
9	ピアノ・エトワール・シリーズ Vol. 44-45	7月18日(月祝)・9月17日(土)	出演：三浦謙司、松田華音	目標値	2
		音楽ホール		実績値	2
10	彩の国さいたま寄席～四季彩亭	4月16日(土) ～2月3日(金)	出演：柳家権太楼、古今亭駒治、柳家権之助、柳亭市弥、春風亭かけ橋 他	目標値	8
		小ホール 埼玉会館 小ホール		実績値	10
11	舞台技術講座	3月28日(火)～3月30日(木)※一部中止	講師：彩の国さいたま芸術劇場技術スタッフ	目標値	200
		埼玉会館 小ホール他		実績値	49※
12	大学等との連携	通年	講師：当財団職員	目標値	55
		彩の国さいたま芸術劇場 他		実績値	45
13	ジャンル・クロスⅠ『新世界』	4月29日(金祝) ～5月1日(日)	演出・振付・出演：近藤良平 演出補・出演：長塚圭史 他	目標値	1,711
		大ホール		実績値	1,744

14	コンドルズ埼玉公演 2022 新作	6月4日(土)・5日(日)	構成・演出・振付：近藤良平 出演：コンドルズ	目標値	1,711
		大ホール		実績値	1,881
15	光の庭プロムナード・コンサート	4月23日(土)～8月20日(土)	出演：田宮亮(オルガン)、戸原直(ヴァイオリン) 他	目標値	480
		情報プラザ		実績値	567
16	イレブン・クラシックス	5月18日(水)	出演：江戸聖一郎(フルート)、大萩康司(ギター)、林田直樹(ナビゲート)	目標値	378
		音楽ホール		実績値	320
17	MEET THE MUSIC～アーティストが学校にやってくる!	10月17日(月)～3月8日(水)	出演：バズ・ファイブ(金管五重奏) 他	目標値	180
		加須市立加須小学校 他		実績値	219
18	MEET THE DANCE～アーティストが学校にやってくる!	10月7日(金)～12月20日(火)	講師：岩淵多喜子、藤田善宏	目標値	350
		川越市立初雁中学校 他		実績値	347
19	みんなのオルガン講座	4月3日(日)～9月11日(日)	講師：大塚直哉、大木麻理	目標値	92
		大練習室 他		実績値	195
20	パーキンソン病患者のためのダンス・プログラム	4月10日(日)～3月26日(日)	講師：小山久美 指導アシスタント：野口熙子	目標値	200
		オンライン		実績値	358
21	バリアフリー・セミナー	2月16日(木)	講師：若月大輔、楠瀬樹宜 他	目標値	150
		埼玉会館 ラウンジ、オンライン		実績値	68
22	親子で楽しめる舞台芸術作品の提供事業(日本昔ばなしのダンス)	3月25日(土)・26日(日)	演出・振付： 川村美紀子(『じごくのあばれもの』) 黒須育海(『ごんぞうむし』)	目標値	384
		埼玉会館 大ホール舞台上		実績値	624
23	彩の国さいたま芸術劇場オープンシアター	8月20日(土)・21日(日)	構成・演出・振付：近藤良平 他	目標値	1,400
		大ホール 他		実績値	2,259

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>事業計画に必要な構成要素が有機的に連関し、当初の予定通りに事業が進められているか。</p> <p>令和4年度は令和2年度または3年度に新型コロナウイルス感染症の影響で実施できなかった公演等をあらためて実施することとなった。また、事業計画で「ジャンル・クロッシングな事業企画」と位置付けていたものが事業番号③⑬の「ジャンル・クロスⅠ、Ⅱ」として、「ダイバーシティ・シアター」と位置付けていたものが⑬「彩の国さいたま芸術劇場オープンシアター」として本格的にスタートした。さらに10月以降は彩の国さいたま芸術劇場が大規模改修工事に伴う長期休館に入ることから、上半期に多数の事業を実施し、下半期は浦和の埼玉会館に拠点を移し、埼玉会館大ホール等で②「彩の国シェイクスピア・シリーズ『ジョン王』」をはじめとした当劇場ならではの良質な舞台芸術プログラムを提供した。</p> <p>助成対象事業全体の入場者数・参加者数は前年度を上回る約31,000人で、新型コロナウイルス感染症の影響により一部の事業が中止となったものの、事業計画をさらに推し進めることができたとして自己評価する。 ※新型コロナウイルス感染症の影響については、(3) 効率性を参照のこと。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p>文化的意義 演劇では、1997年にスタートした「彩の国シェイクスピア・シリーズ」が当年度上演した②『ジョン王』をもって、当初の目標であった全37戯曲の完全上演を達成した。シリーズの翻訳を手掛けてきた松岡和子はシェイクスピア劇全作品の翻訳者として、坪内逍遙、小田島雄志に続く3人目となる偉業を成し遂げた。 ダンスでは、開館当初より国内外の最先端の舞台表現を紹介してきたが、当年度は初来日時に大きな反響を呼んだ④ディミトリス・パパイオアナウの最新作などを上演した。 音楽では⑥バッハ・コレギウム・ジャパンや⑦NHK交響楽団などトップクラスの楽団による公演を継続して実施している。 複数年継続事業である⑩「MEET THE MUSIC～アーティストが学校にやってくる!」、⑪「MEET THE DANCE～アーティストが学校にやってくる!」では、県内における芸術鑑賞機会の地域格差の是正や中学校におけるダンス教育の質の向上にも資することができた。 これらの取り組みには文化的意義が認められると自己評価する。</p> <p>社会的意義 ⑬「彩の国さいたま芸術劇場オープンシアター」では、総合受付にバリアフリー／多言語（英語）案内を設け、外国人・障がいをもつ来場者に必要な情報を提供した。バリアフリー対応には筆談のできるブースを設置、また多言語対応としては特設サイトの英語ページを作成し外国語利用者への情報提供を行ったほか、総合受付に英語通訳を置いて、サポートの必要な来場者の便宜を図った。 対面とオンラインライブ配信を併用して実施した⑫「バリアフリー・セミナー」では、「劇場のバリアフリー〈ソフト編：情報保障のための字幕活用〉」をテーマに実施し、参加した他の劇場や芸術関係者と理解を深めるとともに、当劇場にとっても舞台芸術等の鑑賞機会の提供の在り方について見直すきっかけとなった。 本事業計画では事業名にあるとおり「多様な人々が行き交うオールインクルーシヴな劇場」を目指しており、上記の取り組みには社会的意義が認められると自己評価する。</p> <p>経済的意義 (2) 有効性でも述べているとおり、当劇場が創作・上演する作品では県内はもとより東京をはじめ県外からの来場者も多い。特に看板事業である「彩の国シェイクスピア・シリーズ」では、当劇場大ホールで行った①では約8,000人、埼玉会館大ホールで行った②では約10,000人のお客様にご来場いただくことができ、地域経済にも寄与しているものとする。 また、2日間で約2,200人が来場した⑬「彩の国さいたま芸術劇場オープンシアター」では、劇場敷地内で地域のお店や名産品のマルシェを開催するだけでなく、最寄りのJR野本町駅から劇場までのルートにキッチンカーやトウクトウクを用意し、舞台芸術以外の仕掛けでも賑わいの創出を図った。これらは規模こそ大きくはないものの、直接的に地域経済に貢献する取り組みだと考える。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成し、アウトカムの発現は可能か。

目標「トップクラスの舞台芸術作品の創作・発信」

公演事業として予定していた7事業のうち1事業(事業番号⑤)が公演中止となったが、⑧の人材養成事業「さいたまダンス・ラボラトリ」の一環として岡田利規テキスト・演出による『わたしは幾つものナラティヴのバトルフィールド』を創作・上演した。本作品を加える形で、目標としている7事業を達成し、トップクラスの舞台芸術作品の創作・発信を維持できた。①～④および⑧のアンケート結果から県外からの来場者比率は60.8%であり、前年度(56.1%)を上回ったものの目標値の65%は下回った。当年度からの新企画である③や前回来日時に高い評価を得た④では、それぞれ70%、80%を超えており、これらの事業に対する県外の観客からの注目度の高さがうかがえる。②は埼玉公演前に東京公演を行っていたことから、県外からの来場者比率が若干下がる要因となったと考えられる。

トップクラスの舞台芸術作品を鑑賞できたことに対する満足度は、⑥で100%、⑦で98.1%といずれも目標値の95%以上の高い満足度を維持した。

目標「多様な世代の舞台芸術へのすそ野拡大」

⑬、⑭は既存の指標としては目標を下回ったものの、⑬は地域のお客様に対する新芸術監督のお披露目的な趣旨も持ち合わせた事業であり、また⑭は毎年新作公演を続けながらダンスの鑑賞者層を切り拓いてきた実績がある。それぞれの公演で初めて当劇場で鑑賞した人の割合は⑬で約30%、⑭で約20%となっており、特に⑬は県内の来場者率がおよそ6割となっていることから、本事業が多くの県民に来場のきっかけをつくることのできたと考えられる。

⑮、⑯では、「子育て世代及び高齢者の鑑賞者の合計の割合：50%以上」を目標としている。⑮は目標値を達成できなかったが、当年度の途中まで感染症対策として事前申込制(定員あり)として実施していた影響も考えられるため、劇場のリニューアルオープン以降にあらためて本事業の有効性を検証する必要がある。令和2年度からスタートした⑯は、回を重ねるごとに子育て世代及び高齢者の鑑賞者の合計の割合が増加していたが、当年度は目標を上回る51.0%であった。地域のお客様へ本事業が定着してきた結果と考えられる。

劇場外(オンライン含む)で行った3事業(⑰、⑱、⑳)は合計で22回実施し、前年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受けて目標(20回以上)には未達だったが、当年度は達成した。

⑲については「パイプオルガンへの興味・関心が深まった割合：50%以上」「パイプオルガンに関する意欲や技量が向上した割合：70%以上」を指標としているが、いずれも100%の回答を得られ、本事業がパイプオルガンを用いた教養プログラムとして成果をあげていることを確認できた。

㉑では、子供料金のチケット販売率が全体の40%以上を占め(目標は30%以上)、多くの子供たちに親しみやすいダンスの鑑賞体験を提供するプログラムとして有効であると考えられる。

目標「次代を担う芸術家・舞台芸術の担い手の育成」

⑨、⑩では、いずれも若手実演家を起用する目標を達成し、実演家のステップアップに寄与することができた。また、地域の大学や高校等と連携して行っている⑪、⑫では「今後の活動に役立った割合」「芸術文化への興味・関心が深まった割合」のいずれも目標を上回る100%の回答を得られ、舞台芸術の担い手の育成にも資することができた。

目標「多様な人々が参加できる舞台表現活動の推進」

⑳、㉒の2事業を実施し、目標(2事業以上)を達成した。㉒では県内の障がい者によるアート展や県民参加型プログラムなどを通して、多様な人々に対し、舞台表現活動に参加する機会を提供することができた。

目標「バリアフリーの推進による鑑賞・体験機会の拡大」

㉑は新型コロナウイルス感染症の状況等に鑑み、前年度に引き続きオンラインのみでの開催としたため、オンラインによる参加率は100%であった(目標値は50%以上)。参加者は申込数・当日接続数ともに前年度を上回っており、オンライン活用による体験機会の拡大を確認する結果となった。

㉒では目標値(80%以上)を上回る89.5%の方が「今後の活動に役立った」とアンケートで回答し、バリアフリーへの理解を深めることに寄与した。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

当初は令和2年度または3年度に予定していた新型コロナウイルス感染症の影響で中止となった3事業(②④⑤)を当年度に延期して実施することとなった。彩の国さいたま芸術劇場の大規模改修工事に伴い、②は会場を当劇場大ホールから埼玉会館大ホールに変更した。海外アーティストによる音楽公演⑤は演目を変更しての公演を予定していたが、日本への入国ビザの取得手続きにおける不測の事態が生じ、予定していた来日スケジュールでの公演実施が不可能となり、公演中止を余儀なくされた。⑤についてはやむを得ず中止となったが、②④の実施により当初の事業計画を年度またぎで補完することができたと考える。

③では公演関係者から新型コロナウイルス感染症の陽性反応が確認されたことから、10公演中2公演が中止となった。⑪のうち「さいたま舞台技術フォーラム」は当劇場の大規模改修工事の状況を踏まえてテーマの選定や会場スケジュールの調整に難航し、当年度の開催を見送ることとした。⑫は劇場内での対面クラスとオンラインの双方での開催を想定していたが、新型コロナウイルス感染症の状況に鑑みオンラインでのみ開催した。

一部事業に新型コロナウイルス感染症の影響があったものの、概ね計画通りに進んでいると考える。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

令和4年度の助成対象経費の総額（本体事業）

（要望時）297,835,000円－（決算時）309,740,574円＝（差額）11,905,574円

〔増加の要因〕看板事業である「彩の国シェイクスピア・シリーズ」2作品(①②)の合計で約25,000千円の増額となった。予算規模の大きい事業であるため、要望時の積算の精度をさらに高める必要がある。また、施設の抗菌・抗ウイルス噴霧工事など感染症対策にかかる費用も増額の要因となった。ダンスの海外招聘公演④では、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行およびロシアのウクライナ侵攻の影響による運輸価格の高騰、為替の変動（円安）等により、公演料や道具運搬費等が当初予定していた予算を大きく上回った。近藤良平芸術監督の就任後第1作となった①は、劇場にとっても「ジャンル・クロス」という新たな試みに挑戦する企画で、要望時に様々な経費を正確に見積もることが困難であった。要望時から演出・美術プランが大幅に変更となった結果、経費も増加した。

〔減少の要因〕⑤では公演中止に伴い、出演料などの大部分の経費が発生しなかった。全館をつかってイベントを行う⑬では、一部を外部アーティストによる公演ではなく、県民参加型のイベントとして企画し、芸術監督をはじめ内部のスタッフを中心に企画・運営したことで事業を効率的に実施でき、結果として経費も当初の想定より抑えることができた。

上記のとおり各事業で増減があったものの、全体としては4%ほどの増加にとどまり、概ね計画どおりと考える。

(4) 創造性

自己評価

事業計画の内容が、独創性、新規性、先導性等に優れている（と認められる）か。

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながっている（と認められる）か。

ジャンル・クロス企画

○近藤良平芸術監督が就任時に掲げたテーマ「クロッシング」を体現する取り組みとして「ジャンル・クロス企画」2 作品を創作・上演した。異なる分野のアーティスト同士のコラボレーションから質の高い舞台芸術作品の創造と発信に取り組むとともに、アートジャンルの垣根を取り払うことで、幅広い観客層に訴えかける作品を創作し、地域住民にとってより身近で足を運びやすく、かつ常に新しい創造的発見のできる場としての公共劇場を目指す。

○近藤芸術監督の就任 1 作目となった『新世界』(⑬)では、KAAT 神奈川芸術劇場の芸術監督を務める長塚圭史を演出補・出演に迎え、ダンサーやミュージシャン、現代サーカス・アーティスト（エアリアルやシルホイール）などジャンルや世代の異なるアーティストが参加し、様々な色や音が重なり合う独創的な舞台をつくりあげた。本事業では、これまで舞台芸術にあまり触れる機会がなかった地域住民をターゲットとしてチケットに県民優待価格を設定したほか、通常の公演よりも年齢制限を引き下げ 3 歳以上入場可とし、関連企画として近藤良平による地域住民向けのワークショップを実施した。アンケートから来場者の約 6 割が県内在住者という結果が得られ、当劇場の新たな取り組みのスタートを県民にアピールすることができた。また、埼玉公演後は KAAT 神奈川芸術劇場アトリウムにて近藤良平によるソロバージョン『新世界 solo』を上演し、両劇場の連携強化を図ることができた。

○小ホールで上演した『導かれるように間違ふ』(③)では、主に演劇で活躍する松井周（作）と主にダンスで活躍する近藤良平（演出・振付・美術）の 2 人のアーティストの共同作業から新しい舞台表現の創造を試みた。病院を舞台に不条理劇的なアプローチで描かれる寓話的な世界観を成河をはじめとする俳優陣が豊かな身体表現で彩った。これまでの当劇場のラインナップとは趣向の異なる作品を上演することで新芸術監督の就任をアピールするとともに、新たな観客層の開拓にも寄与した。

○ジャンル・クロスの考え方はプログラム編成全般においても反映されつつあり、当年度についてはディミトリス・パパイオアナウ『TRANSVERSE ORIENTATION』(④)、「さいたまダンス・ラボラトリ」(⑧)で創作・上演した『わたしは幾つものナラティブのバトルフィールド』などにあらわれている。

演劇部門

○シェイクスピアの全 37 戯曲の完全上演を目指す「彩の国シェイクスピア・シリーズ」では①『ヘンリー八世』、②『ジョン王』の 2 作品を上演した。『ヘンリー八世』は令和 2 年 2 月に初演し好評を博したが、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行を受けて埼玉公演の終盤とその後のツアー公演が中止となっていた。当劇場の長期休館の直前に初演と同じキャストでの再演が実現した。関連企画として作品に関する事前勉強会や恒例となっている公演前のミニコンサートなどを開催し、来場者に多様な楽しみ方を提供するとともに賑わいの創出を図った。

○令和 2 年度に当劇場での上演を予定していた『ジョン王』は会場を埼玉会館大ホールに移して上演した。1 日限りのイベントでの利用が多い埼玉会館としては異例の 8 日間 8 公演を実施し、多くの来場者が訪れた。日本人になじみのない英国の歴史劇を演出の吉田鋼太郎は、蜷川前芸術監督時代から続く、戯曲が書かれた当時の上演形式にならってすべての役を男性俳優が演じる「オールメール」上演とし、現在の社会情勢も踏まえたメッセージを織り交ぜつつ、歌唱や舞台上の本水、フライングなど様々な演出手法で現代の観客が楽しみやすい作品に仕上げた。

○『ジョン王』の上演をもって全 37 戯曲の完全上演を達成した本シリーズは、これまでに数々の話題作を上演し、英国ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーとの共同製作や多数の海外公演などでも成果をあげ、全国から来場者が訪れる看板演目として当劇場の評価を向上させてきたと自己評価する。

舞踊部門

○当劇場では開館以来、ピナ・バウシュ、ネザーランド・ダンス・シアター、ラララ・ヒューマン・ステップス、ローザス等世界の最先端のダンスをいち早く紹介してきた。「ダンスのさいたま」は当劇場のもう一つの顔であり、これまでに県内のみならず県外からも多くのお客様にご来場いただいている。

○初来日公演『THE GREAT TAMER』（平成 31 年）が大きな反響を呼んだギリシャの振付家ディミトリス・パパイオアヌーによる新作の国際共同製作に当劇場が参画し、『TRANSVERSE ORIENTATION』を大ホールで上演した。前作で日本の舞台芸術ファンに衝撃を与えたディミトリス・パパイオアヌーは、本作でもその才能をいかんなく発揮し、各所から激賞を浴びた。読売新聞（2022 年 12 月 20 日）の「評論家 3 氏が選ぶ今年の 3 本」では 2 氏が本作を挙げ、朝日新聞の「回顧 2022 舞踊」でも石井達朗氏が「私の 3 点」として取り上げ、「絵画、彫刻、音楽、映画、演劇といった現代のアートの風景を豊かに統合し、ダンスでなければ見せられない夢や無意識の楼阁を豊かなスケールで創出した」と評した。我が国の舞台芸術の知的水準の向上に資する先導性のある事業であり、海外における当劇場の認知度向上や劇場スタッフのスキルアップにもつながると考えられる。

○平成 30 年度からスタートした「さいたまダンス・ラボラトリ」は当初から若手ダンサーの育成だけでなく、作品の創造・発信も続けてきたが、令和 4 年度は令和 3 年 3 月にワーク・イン・プログレスとして発表した『わたしは幾つものナラティブのバトルフィールド』の完全版を創作・上演した（⑧）。「ジャンルを超えた新しい視界をひらく」（ダンスマガジン 2022 年 12 月号／石井達朗）や「ダンスと演劇、双方のポテンシャルを刺激する好企画。ぜひシリーズ化を」（アクトガイド 2022 シーズン 13／伊達なつめ）といった評価を得られ、本事業の獨創性、新規性が評論家に好意的に受け入れられていると考えられる。なお、本作品の招聘について海外のプレゼンターが関心を示しており、来年度以降の海外公演の実施も検討されている。

○近藤良平率いるダンスカンパニー「コンドルズ」は平成 18 年以来毎年当劇場オリジナル作品を創作・上演しており、ダンスをはじめ、生演奏、影絵、人形劇、映像、コントを大胆に展開するジャンル横断的な手法で、県内外で観客のすそ野を拡大してきた。観客がダンスを身近に感じられるようになるだけでなく、近年の作品は当劇場大ホールならではの機構を生かしたダイナミックな演出や他のコンドルズ作品とは趣向の異なる作家性が注目され、芸術的な側面からも評価が高まっている。新作『Starting Over』（⑭）も「観客の記憶を巻き込む驚くべき境地（中略）このような手法は、過去のコンドルズはもとより、従来、おそらくいかなる舞台演出家もなしえなかっただろう」（ダンスマガジン 2022 年 9 月号／貫成人）など複数の評論家から高い評価を得られた。

○親子でダンスを楽しめるシリーズとして人気の「日本昔ばなしのダンス」（⑳）では、2 人の気鋭の振付家を迎えて日本昔ばなしを題材とした新作 2 本立てを上演した。「大人が子どもと一緒に楽しめる公演としても、気鋭の振付家が小品を創作する場としても貴重なシリーズである。第八弾も期待している」（ダンスマガジン 2023 年 7 月号／海野敏）といった評価が得られ、企画の面白さが評価につながっていると考えられる。

音楽部門

○音楽ホールの音響特性を活かし、世界のトップ・アーティストから気鋭の若手まで幅広く起用して、多様なニーズに応える公演を実施するとともに、劇場所所有のポジティブ・オルガンを活用した無料コンサートや教養プログラムもあわせて展開することで、鑑賞機会の提供のみならず普及啓発にも取り組んでいる。

○日本が世界に誇る古楽アンサンブル「バッハ・コレギウム・ジャパン」は、平成 11 年に初登場して以来、毎年継続して公演を行なってきたり、楽団とホールがともに成長してきた経緯がある。平成 28 年度からは提携契約を結び、公演前の関連企画（曲目解説レクチャー等）を行うなど普及啓発活動にも努めている。令和 4 年度は埼玉会館大ホールに会場を移して、同会館では初めてベートーヴェンの「第九」を演奏した（⑥）。作品が生まれた当時の楽器・奏法でアプローチする「古楽での第九」を提示することで、聴きなれた年末の定番曲を新たな視点でとらえ直し、より深い鑑賞体験を得ることにつながった。また、埼玉会館では平成 19 年以来（平成 27、28 年の改修工事中を除く）毎年 NHK 交響楽団の公演（㉑）を開催しており、地域のニーズに応えるかたちで日本のトップ・オーケストラの演奏を身近に鑑賞できる機会を提供している。

○若手ピアニストの発掘・支援を目的としたリサイタル・シリーズ⑨「ピアノ・エトワール・シリーズ」では、Vol. 44 として三浦謙司、Vol. 45 として松田華音による公演を開催した。ピアニストの選定に劇場の独自性を打ち出すとともに、劇場オリジナルのプログラムを編成する方向でアーティストと調整している。このためアーティストにとっても新しいプログラムに挑戦しやすく、自身のレパートリーを増やすきっかけとしても本事業が機能している。

○当劇場の音楽プログラムはクラシック音楽を中心としているが、同時に新たな客層を開拓するための演目についても検討を進めている。こうした検討の中から、世界の様々なアーティストとコラボレートしてきた弦楽四重奏団クロノス・クアルテットの公演を企画し、令和 2 年度当初にはドキュメンタリー・フィルムと生演奏とナレーションからなるパフォーマンス『A THOUSAND THOUGHTS』を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて中止となった。また、当年度には当劇場大ホールにて同アーティストによる『ブラック・エンジェルズ』公演（⑤）を予定していたが、こちらもやむを得ぬ事情で中止となってしまった。

(5) 持続性

自己評価

事業計画を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

経営・組織・人事

○当財団では平成 28 年 4 月 1 日で対象となる有期契約職員のうち無期契約への転換を希望した全員を無期契約化した。雇用の安定化を図ることで、組織活動を持続的に発展する基盤ができたと考えている。

○令和 2 年 6 月 10 日付で加藤容一新理事長が就任後、財団・劇場がどのような方向を目指すべきかを再確認し、今後の事業計画に反映するため、全職員を対象に意見交換やアイデア募集を行った。その上で、本事業計画とは別に財団の組織運営理念として「Art for Life -すべての人生に芸術を-」を掲げ、ミッション、ビジョン、バリュー、ストラテジーを定め、全職員で共有した。この組織運営理念は本事業計画にも合致するものであり、持続的な組織活動発展の指針になると考える。

○令和 3 年 4 月から近藤良平が次期芸術監督として令和 4 年度以降の公演等について準備を進めてきたが、令和 4 年 4 月 1 日に芸術監督に就任した。事業計画を構成する様々な取り組みを実現していくにあたり、劇場として新芸術監督を中心とした運営体制も整いつつある。

○令和 4 年 10 月から彩の国さいたま芸術劇場は約 1 年半の大規模改修工事に伴う長期休館に入った。休館中も埼玉会館の活用や劇場外での取り組みに力を入れることで、事業計画を遅滞なく推し進める。

財源確保

当財団は埼玉県 100%出資による公益財団法人であり、事業費の原資となっているのは指定管理料であるが、事業の安定的な運営のために民間助成金や協賛金等外部資金の獲得に努めている。中でも 115 社（令和 5 年 5 月現在）あるサポーター企業からの協賛金（年会費：1 口 10 万円）の割合が大きいため、新規会員の獲得に向けた営業活動に力を入れている。また、より多角的な財源を確保すべく、企業だけでなく個人からの寄付金の獲得に向けた検討チームをつくり、具体的な導入プランについて検討を進めている。

広報・マーケティング

令和 3 年度に実施した「彩の国さいたま芸術劇場及び埼玉会館等に関する県民意識調査（インターネット調査）」の結果、当劇場および埼玉会館に対する意見として「知名度向上・情報発信」の向上が最も多かった。まだまだ知名度や情報発信が不足しているという結果を受けて、SNS を活用した広報をこれまで以上に強化すべく、令和 3 年度から新たに twitter の「彩の国さいたま芸術劇場＜総合＞」アカウントを設置し、既存の各ジャンル個別の twitter からの発信だけではなく、総合的な情報発信を行っている。また、近藤芸術監督の就任を契機にあらためて当劇場の取り組みをアピールすべく、⑬『新世界』等公演の宣伝も兼ねて、令和 4 年 2 月～4 月に交通広告などを含む様々な広報を展開した。さらに知名度向上を目的として、財団のブランドムービーを制作し、令和 4 年 4 月 1 日に YouTube 上で公開し、その後公共機関や映画館等でも展開した。これらの実施にあたっては、部署を横断した人材からなる広報チームを発展させ、戦略的な展開を可能にする体制を整えた。なお、「県民意識調査」は次回令和 6 年度に実施予定である。

持続的なアウトカムの発現・定着が期待できるか。

事業計画における成果指標の設定については独立行政法人日本芸術文化振興会の PD、P0 の皆様方にも一定の評価をいただいているものであり、これらの達成度合いを観察していくことが、アウトカムの発現や定着の目安になると考えている。

当年度は近藤良平芸術監督体制が実質的にスタートした年であり、「多様な人々が行き交うオールインクルーシブな劇場」に近づくための取り組みも本格的に動き出している。

全指標の達成度は 70.6%となっており、新型コロナウイルス感染症の影響が根強く残っていた前年度（59.3%）を大きく上回る結果となった。事業計画の 2 年目とし持続的なアウトカムの発現や定着に大きく前進することができたとして自己評価する。